

**P1-136** 子宮筋層内に発育し腺筋症が発生母地であると類推される子宮癌肉腫の一例

東京医歯大周産・女性診療科

田尻下怜子, 篠原裕子, 鳥羽三佳代, 津堅美貴子, 若林 晶, 谷口義実, 久保田俊郎

子宮癌肉腫は大部分が子宮内膜に広基性のポリープ状を呈して発生するため、術前に診断されることが多いと言われている。今回我々は、子宮腺筋症を背景に子宮筋層内に発生し、術前診断が困難であった子宮癌肉腫の一例を経験したので報告する。症例は61歳1経妊0経産。下腹部腫瘤感を主訴に当院を受診し、臍上3横指に及ぶ腹部腫瘍を認めた。骨盤MRI検査では、腫瘍径17cm、内部に造影効果を伴う充実性結節を認める嚢胞性の腫瘍で、子宮体部との境界は不明瞭であった。腫瘍マーカーは、CA19-9:508.2U/ml, CA125:89.4U/ml, CA72-4:7.7U/mlと上昇を認めた。細胞診では、子宮頸部: class2, 子宮内膜: class2であった。術前診断は卵巣悪性腫瘍と考え、20日後に手術を施行した。開腹したところ、両側付属器は肉眼的に異常を認めず、腫瘍は子宮後壁筋層内に発育していた。子宮内膜との間に連続性は認めなかった。腹式単純子宮全摘術、両側付属器切除術、大網切除術、骨盤内リンパ節郭清、傍大動脈リンパ節生検を施行し、病理組織学的には子宮癌肉腫と診断された。上皮成分は明細胞腺癌、間質成分は平滑筋肉腫を主体に、一部内膜間質肉腫を認めた。左外腸骨リンパ節・左閉鎖筋リンパ節転移、および大網播種、左基韧带浸潤を認め、転移巣の組織像は癌腫であった。腫瘍の周囲には子宮腺筋症が存在し、その一部は腺筋症の内膜腺や間質を置換するように発育していた。子宮内膜に腫瘍を認めないことも併せて、本症例では子宮腺筋症が発生母地であると類推された。以上より、FIGO stage4b。現在、TJ (PTX+CBDCA) 療法を施行中である。

**P1-137** 子宮肉腫・子宮筋腫の鑑別診断におけるFDG-PET/CTの有用性の検討

高知大

小栗啓義, 山田るりこ, 山本寄人, 前田長正, 深谷孝夫

【目的】子宮肉腫の術前診断は難しく、しばしば、子宮筋腫との鑑別が問題となることがある。子宮筋腫と子宮肉腫の鑑別診断におけるPET/CTの有用性について検討する。【方法】臨床経過やMRI所見より子宮肉腫を疑い、当科で外科的治療を施行した7症例を対象とした。術前に文書による同意を得た上で、FDG-PET/CTを施行し、術後の病理組織診断との対比により、PET/CTの有用性について検討した。同時に、子宮内膜細胞診、CA125, LDH, MRI所見についても検討した。【成績】平均年齢は50.6歳(26-71歳)、最終的な病理組織診断は子宮肉腫2例(leiomysarcoma1例, liposarcoma1例)子宮筋腫5例(typical leiomyoma2例, atypical leiomyoma2例, lipoleiomyoma1例)であった。子宮内膜細胞診は全例で陰性であった。MRI所見はtypical leiomyomaの1例を除き、6例でheterogeneousな所見を認めた。PET/CTでは、子宮肉腫2例、子宮筋腫の2例(atypical leiomyoma症例)にFDGの強い集積をみとめた。PET陽性症例では、病理組織所見での悪性または異型の強い部分に一致したFDGの集積がPET/CT fusion画像で確認された。PET陽性であったatypical leiomyoma症例では細胞密度が高く、免疫染色でmib-1(ki-67)が部分的に陽性であった。【結論】FDG-PETでは子宮肉腫及び低悪性度腫瘍と鑑別を要する子宮筋腫で陽性を示した。FDG-PET/CTは子宮肉腫の鑑別、局在診断に有用な診断方法であることが示唆された。

**P1-138** 最近当科で経験した子宮肉腫の統計札幌医大<sup>1</sup>, 函館五稜郭病院<sup>2</sup>両坂美和<sup>1</sup>, 鈴木孝浩<sup>1</sup>, 松浦基樹<sup>2</sup>, 田中綾一<sup>1</sup>, 伊東英樹<sup>1</sup>, 斎藤 豪<sup>1</sup>

【目的】本邦においては子宮体癌が徐々に増加する傾向にあり、子宮肉腫は頻度が少ないものの当科においても以前より増加傾向にある。症例によっては経過が急速で予後不良だが、完治を得られることも少なくない。当科で経験した症例について予後因子となる項目を検討した。【方法】対象は1996年から2006年まで、当科にて診断、治療を行った子宮肉腫31例につき、組織型、治療法、予後などをretrospectiveに検討した。【成績】11年間で当科において治療を行った子宮体癌は361例であり、そのうちの31例(8.6%)が子宮肉腫であった。治療開始時の平均年齢は59.7±15.7歳であった。組織型はcarcinosarcomaが16例(51.6%)と最も多く、次いでleiomyosarcoma6例(11.8%), adenosarcoma3例(9.7%)であった。28例で手術を行い、進行期は1期が19例(61.3%), 3期7例(22.6%), 4期5例(16.1%)であった。31例中30例は治療を開始したが、12例(38.7%)で治療抵抗性を認め、治療開始後平均106日で原病死している。化学療法のレジメンに関しては、以前はCY-VADICを行っていたが、最近ではTCを行っている。CRの15例のうち1例で3期であったが、14例は1期であった。【結論】子宮肉腫における予後良好群はOptimalに手術を施行することができ、術後3カ月経過時点で再発傾向がない症例であった。予後不良群は治療開始後平均106日で死亡に至っていた。